

長女

古へ頼朝公、尊氏公、永久に世ををさめ、家督さうぞくすといへ共、其内にもさ、はる義ありて、嫡は家をつぎたまはずと聞えたり、北條家は五代つゝがなく、嫡子家をつぎ來たり、百餘ヶ年、關八州を靜謐にをさめ、希代の武家なり、

〔南嶺子三〕日本書紀に、安閑天皇を繼體天皇の長子とのせ、欽明天皇は繼體天皇の嫡子とあり、安閑帝は元妃日子媛として、尾張連草香の女のうみし所なり、故に初に生れ給へ共、嫡子とはか、れず、欽明帝は正后手白香皇后のうませ給ふ故、御弟ながら嫡子とす、嫡は嫡妻又は嫡母の嫡なり、國史に御妾腹の御子は庶兄庶妹など、あり、嫡庶の義により、嫡子、長子、太郎、小太郎の義も是に同じ、

〔倭訓栞中編三〕えひめ 日本紀に長女を訓せり、兄姫の義也、

〔古事記傳五〕愛比賣は兄弟の女子を兄比賣弟比賣と云例多ければ、此國伊は女子の始の意にて、兄比賣氣書紀皇極卷に長女エヒメとあり、伊世國多、又伊豫を元よりの大名にして見れば、彼

大御歌の如く、彌二並宜島々の意にて、愛は宜き意か、吉愛を愛といふ例多し、上文、比賣は、比古に對て、女を美て云稱にて、比は産巢日などの日の意なり、中賣は女なり、

〔日本書紀四續〕神渟名川耳天皇、中母曰媛蹈躡五十鈴媛命、事代主神之、大女也、

〔日本書紀十應神〕四十年正月戊申、天皇召大山守命、大鷦鷯尊、問之曰、汝等者愛子耶、對言甚愛也、亦問之、長與少孰尤焉、大山守命對言、不逮于長子、於是天皇有不悅之色、

〔日本書紀二十三〕豐御食炊屋姬天皇、古推以三十六年三月、天皇、古推崩、九月葬禮畢之、嗣位未定、中略泊瀨王忽發病薨、爰摩理勢臣曰、我生之誰恃矣、大臣將殺境部臣、而興兵遣之、境部臣聞軍至、率仲

子阿椰出子門坐胡床而待、時軍至、乃令來目物部伊區比以絞之、父子共死、乃埋同處、唯兄子毛津逃

匿于尼寺瓦舍、